

10. 原発性肺癌における全身骨シンチグラム

向田 邦俊 宮庄 英明
 上綱 昭光 三島 康弘
 (広島大・2内)
 佐々木正博 山下 征紀
 勝田 静知 小山 矩
 (同・放)
 福原 典昭
 (国療広島)

昭和53年1月より昭和54年6月までの1年6カ月にわれわれが経験した原発性肺癌56例につき、骨転移巣の検索を目的として初回骨シンチグラフィ施行時を中心にその臨床像を検討した。肺癌56例の内訳は、腺癌25例・扁平上皮癌23例・小細胞癌8例である。肺癌56例中初回骨シンチグラムで23例(41.1%)に骨転移を認めた。骨X-Pで骨転移を認めたものは12例(21.4%)であった。骨転移部位は肋骨に最も多くみられ62.5%であり、以下腰椎50%、胸椎37.5%、骨盤29.2%の順であった。組織型別の骨転移頻度は腺癌48%、扁平上皮癌43.5%、小細胞癌25%であった。TNM分類による臨床病期別ではI期40%、II期22.2%、III期48.6%であった。骨転移と血清Al-P値および血清CEA値との関係を見ると、双方とも骨転移を認める症例に高値を示す傾向がうかがわれた。

11. 肺門リンパ節シンチグラフィについて

野井 憲治 沖田 功
 中西 敬 小林 光昭
 橋本 紘行 楠元志都生
 根本みゆき
 (山口大・放)
 宇津見博基 稲葉 伸生
 山田 典将
 (同・放部)
 末富 一臣 永野己喜雄
 (下関中央・放)

今回われわれは、基礎実験として成熟家兎を用いて経気管支的に ^{198}Au Colloidを注入し、シンチグラフィによる肺門リンパ節の抽出を試みた。

気管支内滴下群は12例中7例(58%)、気管支壁局注群では13例中10例(77%)に気管分岐部リンパ節の抽出がみられ、局注群の方が抽出率が高かった。単位重量当たりの組織別放射能の測定でも、剔出リンパ節のCPMは分岐部が最も高値を示した。ついで臨床的応用を試みた。検査対象は当科で診断、治療を行なった12例である。局注1~3日後のシンチグラム像を分類すると、次のようであった。1) 注入部位に留まって拡散しているもの4例、2) 鎖骨上窩の抽出されているもの4例、2) 縦隔のリンパ節と思われるもの3例、4) 肺門のリンパ節と思われるもの3例、5) 気管分岐部リンパ節と考えられるもの4例、以上のように描出し得た。疾患ならびに病態により、リンパ節の描出部位に差異を認めるようである。今後症例を重ねて臨床的意義について明らかにしていきたい。